

2022年3月31日（金）

老球の細道662号

3月の言葉

会津バスケットボール協会 室井 富仁

「会うは別れの始めなり。さよならだけが人生さ」。3月は教員の人事異動の季節である。今年も知り合いの先生が会津を去る。例年だと送別会で別れを惜しみ人生の無常を感じる季節となるのだが、今年もまたコロナのためにそれを許さない状況となってしまった。

私たちが子どもの頃は、怖いものと言えば「地震、雷、火事、オヤジ」が定番だったが、今は「地震、コロナ、ミサイル、戦争」となってきたようだ。

1・読書から

◆「天下に何がクスリだといって、己れを忘れるより薬なことはない」〈夏目漱石『吾輩は猫である』集英社〉：亡き父が購入した夏目漱石全集を読んでいる。名前は誰でも知っている有名作品であるが、今まで実際読んだことがなかった。読んでみると漱石の博学とユーモア、そして発想の凄さに驚かされる。血圧が高い、腰が痛い。気にしない、気にしない。

◆「われわれの眼は見えるものに注がれてはならない。見えないものに注がれるべきである。なぜなら、見えるものは一時的であり、見えないものは永遠だからである」〈『日本の思想・知性』東京大学出版会〉：キリスト教伝道師パウロの言葉。目に見える表面的なことだけでは物事の本質はわからない。眼光紙背に徹す。本質が見えるようになるまで勉強は続く。

2・新聞、パンフレット等から

◆「世界は悪事を働く者によってではなく、それを見ながら何もしない者によって滅ぼされる」〈朝日：ウクライナのキスリツァ国連大使〉：物理学者アインシュタインの言葉を引用して国連安全保障理事会で発言した。見て見ぬふりをする人たちによって独裁は滑りやすい坂道を下るようにして進んで行き、自由の死は始まる。「NO WAR。戦争を止めて。プロパガンダを信じないで」と手書きしたマリーナ・オフシャニコワ。ロシアにも英雄はいた。

◆「死は生の延長線上にあるのだから、身構える必要はないということ。普段通りの時の流れから、ふっと消えていくのが死なのだろう。であれば、今なぜ生かされているのかを見つめ、自分の役割や使命を全うすることに力を注ぎたい」〈朝日：声〉：毎日ウクライナ情勢のニュースで流される映像の裏で多くの人達が死んでいる。戦死をするために生を受けた人等一人もいないのに。改めて「生死事大、無常迅速」。毎日のんべんだらりと生きるのではなく、この命尽きるまで、これでもかこれでもかかと努力をしないと申し訳ない。

◆「批判的に距離を取るのではなく、批判的に近づくこと。これを私たちは目指すべきだ」〈朝日：折々のことば〉：哲学者ブリュノ・ラトウールの言葉。批判は対立を先鋭化するためでなく、視点を交換し吟味しながら、より正しい道を協働して模索するためにある。「思索は口論より生まれる」。政治は正義と平和を結合しようとする努力。一日も早く平和を。

◆「小さな薪でも、くべ続ければ火は消えない」〈朝日：臨床心理士・みたらし加奈〉：困難な活動を続けるには、動き続ける、エレベーターを探さず階段を一步一步上がること。